

7 てっ しょう 鉄 鐘



指 定 国重要文化財 昭和52年 6 月11日
所在地 跡 部
所有者 藤沢 平治

無銘の小型梵鐘^{ほんしょう}であるが鉄製であることが珍しい。

笠形は扁平で、二条の同じ縁によって圏内を上下二段に区分しているのが古様である。竜頭の長軸線と、2個の撞座^{どうざ}を結ぶ線が直角に交差しているのは奈良様式とみられる。乳は粒状の素朴な形態をなし、各池の間に3段3列計9個の4カ所・合計36個ある。このうち7個は欠け落ちているか、もしくは磨滅している。撞座は六葉単弁の蓮花文偏円形で現在はほとんど磨滅している。駒の爪は広狭2条の紐で形づくられている。以上が奈良時代(710~793)的要素と考えられるのに対し、坪井良平博士は、撞座の中心位置が鐘身高の32.4%であること、竜頭の双形式において額上の角が中央の主部までのびて、2個の間隙を形づくっている特色などから、平安時代(794~1184)初期のものと判断されている。

東国における上代の梵鐘の遺例は極めて少ないので、いずれにしても和鐘の初期形態を示す顕著な様式的特徴をそなえたものといえることができる。

法量は総高43.4cm、竜頭高7.5cm、笠形高1.5cm、鐘身高34.4cm、口径31.2~31.5cm、縁厚1.5cm、笠形径22.0cm、撞座径7.0~7.5cm、撞座中心高11.3cmである。

ちなみに、この鉄鐘は昭和初年に浅科御牧ヶ原から出土したものであるという。